

1. はじめに

名古屋大学環境報告書の信頼性を高めるとともに、学生を含む多くの関係者に読みやすい環境報告書とするため、環境配慮促進法第9条に基づき、名古屋大学では2008年以来自己評価を実施してきました。本年度も完成間近の名古屋大学環境報告書2020(案)を用い、学外関係者1名および学内構成員6名(教員1名、職員3名、学生2名)からなる自己評価チームが事前の検討および数時間にわたるオンライン会議により自己評価を実施しました。環境報告ガイドライン2018年版※1(以下、ガイドラインと略)に基づく評価に加え、内容の読みやすさ・理解しやすさのために自由に意見交換を行いました。オンライン会議では、チームメンバーの様々な立場を反映した数多くの多様な意見が出され、チームメンバー個々にとっても新たな視点から環境報告書を理解する機会となりました。



2. 自己評価の概要

(1) 自己評価チーム

- 錦見 端 (元環境安全衛生管理室准教授、座長)
- 香坂 玲 (環境学研究科教授)
- 河内 哲史 (全学技術センター技師)
- 福岡千絵 (文系事務部 総務課 附属学校グループ主任)
- 藤井美樹 (管理部施設課 施設系係長)
- 上田 蓮 (経済学部3年, TEDxNagoyaU実行委員会)
- 水野 裕美 (教育学部3年, TEDxNagoyaU実行委員会)

(2) オンライン会議

令和2年9月3日 9:30~12:00, 13:00~15:00

(3) 評価方法

評価は「環境報告に係る信頼性向上の手引き(第2版)」(環境省、2014年5月)を参考に、ガイドラインの記載項目等を示した評価表を用いて実施しました。評価表には、報告書全体の印象などの記載欄も追加しています。

自己評価チームメンバーには事前に完成間近の名古屋大学環境報告書2020(案)のチェックを依頼し、オンライン会議で意見交換しました。会議ではメンバーにはできるだけ自由で多様な意見を表明してもらうようにしました。出された意見は評価表に記録し、それをもとに本報告書としてまとめました。意見を記入した評価表は資料1を参照ください。

3. 評価結果

(1) ガイドラインに基づく評価

- 環境報告の基本的要件等については、ほぼガイドラインを満足していますが、報告対象組織での「全キャンパス」との記載は具体的にどのキャンパスまで含むかははっきりしません。また、個々の記事を読むと報告対象組織は集計項目で異なっている場合があります。報告対象組織について、もう少し説明が必要ではないでしょうか。また、報告書末尾に掲載されている主な実績評価指標の推移のグラフについては、掲載する指標や期間を見直す必要があるかもしれません。本来、主な実績指標の推移は環境報告の冒頭に概要を示すためにあることが望ましいので、掲載場所についても再検討してはいかがでしょうか。
  - 重要な環境課題について、正確にかつ理解しやすく記載されていました。たとえば、キャンパスマスタープランに基づく二酸化炭素排出削減、廃棄物や化学物質等の発生量・管理状況等についても過去からの推移のグラフを含め、適切に記載されていました。その一方で大学としてどういった方針でさらなる削減を進めようとしているかといった記載は必ずしも十分ではありませんでした。大学の構成員に協力を呼びかけるような表現を含め、更に充実が望まれます。
  - ガイドラインで定められている長期ビジョンが大学として定まっています。本年4月に東海国立大学機構(以下、東海機構と略)が発足しましたが、例えば、持続可能な社会の実現に貢献するための東海機構としての長期ビジョン・ミッション等を定め、それに基づいて名古屋大学および岐阜大学が施策を執行し、その結果を環境報告書で公開するというような形が考えられます。
  - 名古屋大学ではリスクマネジメントに関わる複数の組織がありますが、ガイドラインで要求されている包括的なリスクマネジメントに関する情報は記載されていませんでした。先端的な教育研究が進められる大学ではその運営に伴いさまざまなリスクを内包しています。東海機構と名古屋大学、岐阜大学の関係も含め、次年度にはリスクマネジメントに関する包括的な情報を掲載することを期待します。
  - 大学としてのガバナンス体制に関連しますが、SDGs担当副総長と環境安全担当理事の関係が読み取れませんでした。今後は読者にわかりやすく説明することが必要と思われる。また、将来的には東海機構を含めたガバナンス体制について包括的に記載されることが望まれます。
  - ガイドラインでは重要な環境課題の特定方法についても記載することが求められていますが、特定するための手順などは記載されていませんでした。今後、検討されることを期待します。
  - 汚染予防の観点では重要な項目は記事として掲載されていますが、これまでの自己評価で指摘されてきたように大気汚染に関する記載がありません。名古屋大学でも大気汚染防止法の特定施設があると聞いていますので、次年度以降対応されることを期待します。
  - 昨年度の自己評価で指摘がありました生物多様性への取組に関する記事や水使用に関する記事(井戸水と市水の割合表示)は適切に対応していました。なお、後者については、グラフで示されたデータと本文の記載に整合性がありませんでしたので、見直しが必要です。
- (2) 内容の正確性・読みやすさの観点からの評価
- 全体として読みやすい・読みたくなる報告書としての評価でした。冒頭の東海機構の記事もデザインを含め好評でした。なお、東海学生機構の記事から環境報告の記事へのつながりがやや唐突に感じました。

- 名古屋大学の学生の立場からは、報告書を読むことにより学内で実施されている様々な施策の関連性がよく理解できるようになったとの意見がありました。
  - 1章および2章の記事は非常に興味深いテーマが取り上げられていました。写真なども多く読みやすかつ内容も非常に面白いのですが、全体として記事のタイトルや文中の小見出しの表現がやや「おとなしく」感じました。客観的に記載すべき記事もあるとは思いますが、より多くの読者を引きつけ読んでもらうためには記事によっては少し思い切った表現を使うなど、読者を引きつける工夫があるとよいと思います。
  - 学生による教員へのインタビュー、学生の活動紹介および学生の質問に答えるコーナーなど、学生目線に立って作成されていることが理解できる紙面となっていました。今後、さらに広範な関連記事が増えることを期待します。たとえば、学生のサークル活動等が複数紹介されていますが、持続可能な発展の観点からは他にも興味ある活動を行っている学生サークル等があると思われ、これまで取り上げられていない活動も紹介してはどうかと思います。学生サークル等の紹介記事は比較的客観的な記述となっていますが、学生自身の活動についての思いなども記載してはどうかと思います。また、大学の授業を紹介する記事は好評でしたが授業に対する学生の感想なども入れるとなおよいと思います。
  - 毎年継続的に実施されている活動について、その年度の環境報告書の記事とするかどうかの判断は難しい点がありますが、読者にとってわかりにくいものについては、注釈等で説明が必要ではないでしょうか。たとえば、省エネルギー対策としてESCO事業について言及されています。以前の環境報告書に詳しい記載があるのですが、本年度の環境報告書だけを読む者にとっては説明が不足してわかりにくいと感じられます。また、同記事ではESCO事業について附属病院のケースを示していますが、附属図書館等でもESCO事業を行っており、より多くの関係者に興味を持ってもらうためにも、そうした記載も有用と考えます。
  - 一部の記事については、小さすぎて文字が読めない図が引用されている、興味深い数値データが記載されているがグラフ等で表現したほうがわかりやすい、「私は…」で始まる記事では筆者に関する情報(写真等を含む)が記事冒頭にあったほうがよい、などの意見がありました。引き続き、読み手目線に立った編集を期待します。
  - 読者の多様性の観点からは、将来的に障がい者等を考慮することも必要ではないでしょうか。具体的には色覚異常を有する読者のために、折れ線グラフの色を考慮したほうがよいとの意見がありました。
- (3) その他
- 数年前の環境報告書から男女共同参画など広義の環境問題への取組についても自己評価で記載されていますが、今後SDGsの観点から含め、より広範な記事が掲載されることを期待します。たとえば、報告書16ページには大学の社会貢献の取組状況をSDGsの枠組みを使って評価するTHE大学インパクトランキングの表が掲載されており、名古屋大学は国内で上位に入っている項目が多くあり興味深く読みました。記事では順位のみが紹介されていますが、より詳しい内容を知りたいと思いましたが、報告書の内容として理系関係の記事が多いため、文系の学生などがより興味を持てるよう、文系の記事を増やした方がよいという意見がございました。一方、現状程度でバランスが取れているとの意見もありました。
  - 本年度の二酸化炭素排出量や廃棄物発生量等は、コロナ禍により特異的な影響が出るのが予想されます。本年度のうちから、その影響を評価・検討し、来年度の環境報告書に反映されることを期待します。

来年度開催予定の東京オリンピックではSDGsの達成に貢献するため、持続可能な形で大会運営等様々な取組が進められています。このような観点から、たとえば名古屋大学の運動サークルの環境対策などの記事があってもおもしろいのではないのでしょうか。

全体としてレベルの高い報告書といえますが、報告書の認知という点では関係者以外ではかなり低いといわざるを得ません。特に、学生目線で作成されているのですが、名古屋大学の学生の認知度は不十分です。印刷物の配布先やホームページへの掲載方法の見直し、あるいはSNSを利用して名古屋大学全構成員に環境報告書の発行を知らせるなど新しい手段についても今後検討することを期待します。

4. 自己評価メンバーの感想

環境報告書の自己評価という目的からは少し外れますが今後の参考のために自己評価を終えたメンバーの感想を要約し以下に記載します。

- 教員、職員、学生および部外者と様々な立場にもかかわらず、オンライン会議では自由かつ率直に意見交換ができ、良い経験となりました。
- 自分一人だけでは思いつかないような見方、意見を聞くことで勉強になりました。こうした多様な意見により、さらに環境報告書がレベルアップすると思います。
- 自己評価にかかわり、改めて編集チームの多大な努力を認識しました。

4. おわりに

環境報告書は大学全体の持続可能な社会の形成に向けた活動を紹介するものです。もとより、自己評価は大学全体の活動そのもの評価するものではありませんが、自己評価というプロセスを通して大学における持続可能な社会形成のための活動が少しでも前進することを願っています。本年度も編集チームをはじめとした関係者の皆さんの努力で素晴らしい報告書を作成されたことに敬意を表します

5. 補足

今回の自己評価で出された意見のうち、編集チームにより今年度の環境報告書に反映したほうがよいと判断されたものについては名古屋大学環境報告書2020の確定版に反映されています。

※1: 環境報告ガイドライン(2018年版)(環境省、2018年6月)

|            |  |
|------------|--|
| 評価者氏名      | 錦見端（元環境安全衛生管理室准教授 ※座長）、香坂玲（環境学研究科教授）、河内哲史（全学技術センター技師）、福岡千絵（文系事務部 総務課 附属学校グループ主任）、藤井美樹（管理部施設課 施設系係長）、上田蓮（経済学部3年）、水野（教育学部3年） |
| 実施日時       | 2020年9月3日（木）9：30～15：30   |
| 実施した手続きの内容 | 環境省「環境報告ガイドライン2018年版」に準じつつ、大学独自の社会的責任を考慮し実施した。   |

(※) 報告事項に関する解説は、ガイドライン本文で、具体的に記載されています。

| 報告事項（注1）           |                                      | 記載ページ（注2）  | 記載しない理由              | 評価者の記入欄 |   |
|--------------------|--------------------------------------|------------|----------------------|---------|---|
| 【第1章】 環境報告の基礎情報    |                                      |            |                      | 評価（注3）  | 所見（注4）  |
| 1. 環境報告の基本的要件（P6）  | <input type="checkbox"/> 報告対象組織      | 11, 57, 58 |                      | △       | ・ p. 11 「全キャンパス」とあるが、3章のデータはそれぞれ集計範囲が異なる。その旨の断りを入れた方が良いのではないかと。例えば、「全キャンパス」を「東山、鶴舞、大幸、東郷他国内主要キャンパス（詳細はp58をご覧ください）。ただし、データによって集計範囲は異なることがあり、その場合、データに記載していません。」などはどうか。（※）<br>・ p. 11 環境報告書の特徴：「高校生」を「中高生」に変更したほうがよい。（※）<br>・ p. 57 (7)の表の合計数が間違っている（附属学校が加算されていない）。（※） |
|                    | <input type="checkbox"/> 報告対象期間      | 11         |                      | ○       | ・ 「一部に他の年度」とあるが、可能であれば年度を明示できないか。   |
|                    | <input type="checkbox"/> 基準・ガイドライン等  | 11         |                      | ○       | ・ 現在の環境報告書（案）には記載がないが、最終版には「編集方針」に「環境報告ガイドライン2018年版」（環境省）に準拠する旨を記載する（編集チーム）。  |
|                    | <input type="checkbox"/> 環境報告の全体像    | —          | 関係する他の報告書等はないため、記載不要 | —       |   |
| 2. 主な実績評価指標の推移（P7） | <input type="checkbox"/> 主な実績評価指標の推移 | 57         |                      | △       | (8)のグラフ<br>・ 1990年度からのグラフはわかりにくい。過去5年間ほどのグラフに変更してはどうか。<br>・ 主な実績評価指標としてCO2排出量（p. 45）を追加し、電力消費と建物面積は削除してはどうか。<br>・ 折れ線の色が色覚障がい者にとって判別しにくいのではないかと。（報告書中の他のグラフも該当するかもしれない。）  |

| 報告事項（注1）                    |  | 記載ページ（注2） | 記載しない理由    | 評価者の記入欄 |  |
|-----------------------------|--|-----------|------------|---------|--|
| 【第2章】 環境報告の記載事項             |  |           |            | 評価（注3）  | 所見（注4）   |
| 1. 経営責任者のコミットメント（P9）        | <input type="checkbox"/> 重要な環境課題への対応に関する経営責任者のコミットメント    | 1, 9      |            | ○       | ・ p. 9 文末の2文の最初がいずれも「これからも」で始まるため、どちらかを変更したほうがよい。（※）   |
| 2. ガバナンス（P10）               | <input type="checkbox"/> 事業者のガバナンス体制                     | 41        |            | △       | ・ p. 41の組織図は執行体制を示したもので、組織のガバナンス体制ではない。執行体制としても、少なくとも伊藤副総長（SDGs担当）と環境安全担当理事および総長との関係を明示したほうが良いのではないかと。なお、p. 41の「1 環境安全衛生」で東海国立大学機構の「統括本部」について触れている。これが名古屋大学にとってのガバナンス体制と理解できるのではないかと。そうであれば、「統括本部」が名古屋大学と岐阜大学を監督すると記載すれば関係性が明確になる。 |
|                             | <input type="checkbox"/> 重要な環境課題の管理責任者                   | 41        |            | ○       | ・ 名大の環境課題全般を統括するのは環境安全担当理事と考えられる。  |
|                             | <input type="checkbox"/> 重要な環境課題の管理における取締役会及び経營業務執行組織の役割 | 41        |            | △       | ・ 上記「事業者のガバナンス体制」欄のコメントを参照のこと。   |
| 3. ステークホルダーエンゲージメントの状況（P11） | <input type="checkbox"/> ステークホルダーへの対応方針                  | —         | 未実施        | —       | ・ 大学全体としての方針があれば望ましいが、大学の場合、個別の教育研究等のテーマでステークホルダーへの対応を行っていることも多い。これを大学全体の「対応方針」として示すのは難しいと判断される。   |
|                             | <input type="checkbox"/> 実施したステークホルダーエンゲージメントの概要         | —         | 未実施        | —       | ・ 上記「ステークホルダーへの対応方針」欄のコメントと同様、大学全体としての「概要」を示すのは難しいと判断される。  |
| 4. リスクマネジメント（P12）           | <input type="checkbox"/> リスクの特定、評価及び対応方法                 | —         |            | ×       | ・ ガイドラインで要求されているリスクマネジメントに関する情報が記載されていない。  |
|                             | <input type="checkbox"/> 上記の方法の全社的なリスクマネジメントにおける位置付け     | —         |            | ×       | ・ 同上   |
| 5. ビジネスモデル                  | <input type="checkbox"/> 事業者のビジネスモデル                     | —         | 事業の性質上記載不要 | —       |  |

| 報告事項<br>(注1)             |   | 記載ページ<br>(注2) | 記載しない理由                          | 評価者の記入欄 |  |
|--------------------------|---|---------------|----------------------------------|---------|--|
| 【第2章】 環境報告の記載事項          |   |               |                                  | 評価 (注3) | 所見 (注4)  |
| 6. バリューチェーンマネジメント (P14)  | <input type="checkbox"/> バリューチェーンの概要                          | —             | 事業の性質上記載不要                       | —       |  |
|                          | <input type="checkbox"/> グリーン調達の方針、目標・実績                      | 44            |                                  | ○       | ・本文の第2および第3段落の冒頭の「本学の」は不要ではないか。(※)<br>・本文中の「文具」は「事務用品」のようが良いのではないか。(※)<br>・コラム記事のタイトル:「初め」は「始め」に修正する必要がある。(※)<br>・コラムの図表に実績表やリユースするものの写真等、具体的な情報があつた方が良い。(※) |
|                          | <input type="checkbox"/> 環境配慮製品・サービスの状況                       | —             | 事業の性質上記載不要<br>(人材の輩出はここでは含めていない) | —       |  |
| 7. 長期ビジョン (P15)          | <input type="checkbox"/> 長期ビジョン                               | —             |                                  | ×       | ・環境問題に対する長期ビジョンがない。キャンパスマスタープランに基づくCO2削減目標は中期計画レベルと判断される。<br>・今後は東海大学機構として環境保全・SDGsについて長期ビジョン・ミッションを提示し、その具体的な成果を本報告書で報告するという形が望ましい。                         |
|                          | <input type="checkbox"/> 長期ビジョンの設定期間                          | —             |                                  | ×       | ・環境問題に対する長期ビジョンがない。  |
|                          | <input type="checkbox"/> その期間を選択した理由                          | —             |                                  | ×       | ・環境問題に対する長期ビジョンがない。  |
| 8. 戦略 (P16)              | <input type="checkbox"/> 持続可能な社会の実現に向けた事業者の事業戦略               | —             |                                  | ×       | ・長期ビジョンがないので、ここでいう意味の戦略もない。  |
| 9. 重要な環境課題の特定方法 (P17)    | <input type="checkbox"/> 事業者が重要な環境課題を特定した際の手順                 | 41, 42        |                                  | △       | ・手順は記載されていないが、組織図があるので参考にはなる。  |
|                          | <input type="checkbox"/> 特定した重要な環境課題のリスト                      | 42            |                                  | ○       |  |
|                          | <input type="checkbox"/> 特定した重要な環境課題を重要であると判断した理由             | 41, 42        |                                  | △       | ・明確な記載がないが、組織図があるので参考にはなる。   |
|                          | <input type="checkbox"/> 重要な環境課題のバウンダリー                       | 42            |                                  | △       | ・明確な記載はないが、名古屋大学がバリューチェーン・マネジメントを実施していないこと、およびp. 42の一覧表からすべての項目は名大内の課題と判断される。  |
| 10. 事業者の重要な環境課題 (P18-19) | <input type="checkbox"/> 取組方針・行動計画                            | 42            |                                  | ○       |  |
|                          | <input type="checkbox"/> 実績評価指標による取組目標と取組実績                   | 42            |                                  | ○       |  |
|                          | <input type="checkbox"/> 実績評価指標の算定方法                          | 42            |                                  | ○       | ・p. 42の一覧表に詳細な説明のあるページを示している。  |
|                          | <input type="checkbox"/> 実績評価指標の集計範囲                          | 42            |                                  | ○       | ・p. 42の一覧表に詳細な説明のあるページを示している。  |
|                          | <input type="checkbox"/> リスク・機会による財務的影響が大きい場合は、それらの影響額と算定方法   | —             | 事業の性質上記載不要                       | —       |  |
|                          | <input type="checkbox"/> 報告事項に独立した第三者による保証が付与されている場合は、その保証報告書 | —             | 未実施                              | —       |  |

## 上記以外の各記事（テーマ別）

| 項目        | 記載ページ<br>(注2) | 記載しない理由 | 評価者の記入欄 |   |
|-----------|---------------|---------|---------|---|
|           |               |         | 評価 (注3) | 所見 (注4)   |
| □ 環境教育    | 19-22         |         | ○       | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ p. 19 本文が「本セミナー」から始まっているが、セミナー名が明示されていないのでわかりにくい。</li> <li>・ p. 19-20 セミナーで学生さんが議論している写真などがあればなおよい。</li> <li>・ p. 19-20 授業に対する学生の声があればなおよい。</li> <li>・ p. 20 中見出し3が昨年そのままになっている。(※)</li> <li>・ p. 19-20 記事中に幾度か「私は(が)」との記載が出てくる。記事の冒頭に記事に執筆者を紹介するような文があるとわかりやすい。</li> </ul>  |
| □ 学生の環境活動 | 34, 35-36     |         | ○       | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ p. 35-36 記事以外にも環境報告書に取り上げて良いサークル活動があるのではないかと。網羅的な調査や公募などの方法が考えられる。</li> <li>・ p. 36 なごやぬいぐるみ病院：本文中の「学童」は「学童保育所」に変更したほうがよい。(※)</li> <li>・ p. 34 Song of Earthの池清掃活動について：リーダーの強い思い入れで実施した活動である旨を記載したほうが記事にインパクトがあるのではないかと。(補足) 素晴らしい活動なのに学内での認知が十分でない。事前の広報により力を入れた方がよい。(本補足は環境報告書へのコメントではないが、重要なので記載しました。)</li> </ul>   |
| □ 気候変動    | 45-46, 29     |         | ○       | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ p. 45-46 毎年定期的にCO2排出量などを報告することは非常に重要であるが、来年の報告ではコロナ禍の影響が出る可能性があり、事前に検討しておくことが望ましい。</li> <li>・ p. 45-46 オリンピック開催時の環境対策についてはいろいろ議論されている。来年度東京オリンピックが開催されるかどうかははっきりしないが、運動サークルに所属している学生さんのスポーツにかかわる環境対策などの記事があってもよいかもしれない。</li> <li>・ p. 45 学生の省エネラウンド(巡回)などの活動についての記事があるとよい。</li> <li>・ p. 45 第1節の第5段落：意味が不明確である。「減少」などの表現を追記することが必要である。(※)</li> <li>・ p. 45 ESCO事業について注釈を入れた方がよい。中央図書館もESCO事業があり、記載があるとよい。(※)</li> <li>・ p. 45 ESCO事業については過去から適宜記事にされているが、どこかで総括的な記事があるとよいかもしれない。</li> <li>・ p. 46 右上のグラフに凡例がない。(※)</li> <li>・ p. 45-46 コロナ禍で空調の使用方法が大きく変わったが、そうした影響についてコメントがあってもよいかもしれない。</li> <li>・ p. 46 アクションプラン図中の字が小さくて読めない。(※)</li> <li>・ p. 46 J-クレジットについて記載した部分がわかりにくい。J-クレジットで得た資金を省エネに使ったなどの記事の方がよいのではないかと。</li> <li>・ p. 29 3番目の質問の1段落目の文章は、2番目の質問の回答としたほうがよいのではないかと。(※)</li> <li>・ p. 29 2番目および3番目の質問には「電力」が含まれているが、回答にはそれに関する記載がない。整合性をとったほうがよい。</li> </ul> |
| □ 水資源     | 46            |         | △       | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ グラフに井戸水の割合(ベースは東山地区?)が掲載されているが、ほぼ一定である。一方、文中には「年々減少させる」とあり矛盾している。グラフのデータが正しいのであれば、グラフ中の井戸水割合は削除し、文中に「井戸水の割合は毎年度70%程度で推移」等の記載をする等が考えられる。(※)</li> <li>・ 年々水使用量が増えている。水使用量の削減のため節水型衛生器具について記載されているが、それ以外にどのような方策で削減を進めようとしているのか記載があるとよい。</li> <li>・ キャンパスの規模からすれば鶴舞キャンパスの水使用量が非常に多い。附属病院による影響と思われるが、考察として記載しておくのも一案である。</li> <li>・ 削減努力を示すために、構成員1人当たりの水使用量などの原単位表示を検討してはどうか。(廃棄物発生量等の他の指標についても同様。)</li> </ul>  |
| □ 生物多様性   | 33, 52        |         | ○       | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ p. 33 タイトルが非常に魅力的でよい。</li> <li>・ p. 52 2番目の回答：「山奥」との表現はあいまいである。もう少し具体的に記載できないか。たとえば、「キャンパスの〇〇のあたりが樹木の多いエリアです」などの記載があるとわかりやすい。(※)</li> <li>・ p. 52 2番目の回答：東山の敷地面積は記載されている一方、森(または緑地?)の面積(または割合)が記載されていない。</li> </ul>  |

| 項目         | 記載ページ<br>(注2)                | 記載しない理由 | 評価者の記入欄 |   |
|------------|------------------------------|---------|---------|---|
|            |                              |         | 評価(注3)  | 所見(注4)  |
| □ 資源循環     | 23-24, 31-32, 39, 44, 48, 52 |         | ○       | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ p. 23-24 研究の内容を生き生きと伝える写真も多く、読みやすく、かつ興味のわく記事である。</li> <li>・ p. 23 「いきなり」という表現(2か所)に違和感を感じる。</li> <li>・ p. 23 タイトル「CO2量」は「CO2排出量」のほうが良いのではないか。</li> <li>・ p. 31-32 写真キャプションが簡単すぎる。もう少し説明があったほうがより興味がわく。</li> <li>・ p. 31 タイトル中の「ESD」については説明が必要ではないか。別の表現に変えてもよいかもしれない。(※)</li> <li>・ p. 31 記事冒頭の図について説明が必要ではないか。「都市の木質化プロジェクト」のロゴだけでもよいかもしれない。(※)</li> <li>・ p. 31 2節の小見出し:「学生活動を」を「学生を」に変更するべきである。(※)</li> <li>・ p. 31 2節の文末の「(人づくり)」に唐突な感じを持った。1節の「(街づくり)」もあわせて、工夫するとなお良いと思う。例えば、小見出しにこれらの用語を掲載するなど一案である。</li> <li>・ p. 32 3節最後の「森林と都市部をつなぐ活動」の都市部における成果について、写真等での説明があればなおよい。</li> <li>・ p. 39 記事が「私は」で始まっているので、執筆者の写真・説明を記事の冒頭においてはどうか。中見出し1の前に、執筆者の紹介文を入れてもよい。(※)</li> <li>・ p. 39 小見出しは、本文の内容を端的に表す言葉でこの記事特有のものとした方が読者の興味を惹きやすい。</li> <li>・ p. 39 本文3行目:「数多な」を「数多くの」に変更したほうがよい。(※)</li> <li>・ p. 43 マテリアルバランス:紙類の使用量が前年度比で大幅に減少しているが、理由の記載があるとよい。</li> <li>・ p. 48 2018年度の産業廃棄物の増加が研究室由来との記載があるが、間違いの可能性があるので確認が必要である。(※)</li> <li>・ p. 52 ページレイアウト:廃棄物の記事(1番目と3番目)の間に生態系の記事(2番目)がある。廃棄物の記事が連続するようにした方がよい。(※)</li> <li>・ p. 52 3番目の記事で一般ごみの種類ごとに1日当たりの発生量が記載され参考になるが、グラフ表現にした方がわかりやすいのではないか。</li> <li>・ p. 52 「ゴミ」、「ごみ」、「廃棄物」と表現がいろいろあり統一できないか。</li> </ul> |
| □ 化学物質     | 48, 49                       |         | ○       | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 近隣住民の観点からは、大学における化学物質の使用が気になっている点のひとつであるが、48ページの「契約業者の現地確認を定期的実施しています」ことなど、大学がきちんと対応していることがわかる記事である。</li> </ul>  |
| □ 汚染予防     | 43, 50                       |         | △       | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 大気汚染に関する記事を掲載すべきである(名古屋大学にも大気汚染防止法の特定施設がある)。</li> </ul>  |
| □ 安全衛生、防災  | 25-26, 37-38, 51             |         | ○       | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ p. 25 読みやすく、非常に面白い内容である。タイトルを中見出し2のような表現にしたほうがより引きつけられると思われる。</li> <li>・ p. 25-26の記事の分類は研究ではないのか。(※)</li> <li>・ p. 37-38 減災館の紹介記事があればなおよい。</li> <li>・ p. 37-38 大学全体の防災への取り組みがわかり附属学校の生徒にも参考になる。(附属学校職員)</li> <li>・ p. 38 文章最後「自宅の防災を見直してみてください」とあるが、学生向けに見直す項目等の具体的な記載があるとよい。</li> <li>・ p. 51 右上のポスターがレベルが高いと感じた。</li> <li>・ p. 51 ※2の休業災害および不休業災害の説明が間違っている。(※)</li> </ul>   |
| □ 東海国立大学機構 | 1-8                          |         | △       | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 冒頭の東海国立大学機構の記事が唐突に感ずる。9ページ目から名大環境報告書になるが、その関連性も不明確で、初めて読んだ人はわかりにくいのではないか。例えば、目次ページを9ページ目とし、冒頭の記事と環境報告に関する記事の区切りをつけてはどうか。(※)</li> <li>・ 東海国立大学機構についていろいろ紹介したいという意図はわかるが、内容が多すぎるように感じる。</li> <li>・ p. 1-2 東海国立大学機構のロゴマークをより大きくする、位置をかえるなどして、より目立つようにしたほうがよい。また、岐阜大学と名古屋大学のロゴマークも追加してはどうか。(※)</li> <li>・ p. 7 一部「東海機構」との表現が見られる。統一したほうがよいのではないか。(※)</li> </ul>  |
| □ その他      | 10, 13-16, 27-28, 29, 47, 50 |         | ○       | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ p. 10 第2段落冒頭の「新型コロナウイルス」は「新型コロナウイルス感染症」としたほうがよい。</li> <li>・ p. 15 3番目の記事:写真は名大の事例の写真に差し替えたほうがよい。(※)</li> <li>・ p. 16 2番目の記事:賞状の写真が掲載されているが、表彰式等の他の写真に差し替えたほうがよい。(※)</li> <li>・ p. 16 3番目の記事:表によれば名古屋大学はいくつかの分野で国内順位がかなり高い。こうした面に関する記事があってもよいのではないか。</li> <li>・ p. 27 タイトルにやや違和感を感じた。</li> <li>・ p. 28 2人目の学生の質問には2つの項目が含まれているが、分けた方がよいのではないか。</li> <li>・ p. 28 学生のインタビュー記事はもっと長くてもよいのではないか。</li> <li>・ p. 29 1番目の質問の回答:活動の具体的な内容が書かれていたほうがよい。URLは文末の記載とするべきではないか。(※)</li> <li>・ p. 47 学生の憩いの場の自己メンテナンス:取り組み組織として、附属図書館も加えるべきである。(※)</li> <li>・ p. 47 今回の記事は、どちらかというと2章(社会的責任・環境コミュニケーション)に載せたほうがよいのではないか。</li> <li>・ p. 50 コラム(だれでもトイレ)にもSDGsのシンボルを記載してはどうか。(※)</li> </ul>   |

- ・ ページがカラフルで読みやすい。
- ・ バランスのとれた内容で読みやすい。
- ・ 良い報告書で、じっくり読むと編集チームの努力がよくわかる。
- ・ 冒頭のページで東海大学機構のイメージをつかむことができたが、環境報告書としてはやや違和感があった。
- ・ 学生としては、報告書の前半の記事は写真等が多く興味を持って読めるが、後半（3章）になると文字が多く内容が硬くなる印象を持った。
- ・ 前記のような面はあるが、環境報告書として第3章に示すような基礎データを毎年度開示することは重要である。
- ・ 理系の内容が多い。文系学生が興味を持てるような分野の記事を増やしてほしい（例えばジェンダーに関する記事）。一方、バランスが取れているとの意見もあった。
- ・ 全体として、記事のタイトルが硬い感じのものが多いように思う。読んでもらうためには、より親しみやすいもタイトルが望ましい。
- ・ 学生目線で作成されていることがよくわかった。学生の声をもっと増やすとなおよいと思われる。
- ・ 良い報告書であるが、学内外の広報が不足しており、名古屋大学構成員への認知度が低い。今後は広報についてさらに検討すべきである。
- ・ 環境報告書の広報という点で、環境報告書を使った授業の記事を積極的に掲載してくべきではないか。
- ・ 名大構成員全員がアクセスできるSNS等で環境報告書の広報をしてはどうか。

(注1) 環境報告ガイドライン2018に基づく。( )内はガイドラインの該当ページを示す。

(注2) 該当する記載ページを記入する。記載のないものには「-」を記入し、その理由を記載する。

(注3) 評価を「○」(良好)、「△」(やや不十分)、「×」(不十分)で記載する。

評価にあたっては、以下の観点を考慮する。

目的適合性：読者に有用な情報かどうか

表現の忠実性：不可欠な情報が網羅(完全性)、情報に偏りがないか(中立性)、情報に誤りや漏れがない(無誤謬性)

比較可能性：読者が情報を比較するための参考情報を記載しているか。例えば、経年比較、同一事業者比較、中間目標との比較など。

検証可能性：前提条件、集計範囲、算定方法等が記載されているか。

適時性：情報はタイムリーか。例えば、報告対象期間後であっても重要な出来事は記載しているか。

理解容易性：特別な専門知識のない読者でも理解しやすいか。

(注4) 青字：2019年度自己評価コメントのうち、2020年度版で未対応、あるいは対応したがさらに本年度にコメントのあるもの

所見欄のコメント末尾の(※)：当該コメントの内容を本年度の環境報告書に反映した項目を示す。